

植民地アメリカのジャーナリズム : New England Courant 1

著者	荒木 暢也
出版者	法政大学社会学部学会
雑誌名	社会志林
巻	67
号	1
ページ	1-32
発行年	2020-07
URL	http://doi.org/10.15002/00023386

植民地アメリカのジャーナリズム

New England Courant 1

荒 木 暢 也

1

ジェームス・フランクリン(James Franklin)は、イングランド移民のジョサイア・フランクリン(Josiah Franklin)を父に、マサチューセッツ、ナンタケット生まれのアバイア・フォルジャー・フランクリン(Abiah Folger Franklin)を母に、1697年、ボストンに生まれた。母方の祖父は、詩人でマサチューセッツ開拓初期に原住民との交流に尽力した、ピーター・フォルジャー(Peter Folger)であった。

家庭の貧窮が主な原因で、ジェームスは若くして手に職を持つべく、父の故郷、イングランド、ノーサンプトンシャー、エクトン(Ecton, Northamptonshire)へ渡り、印刷職人の修業を始めた。修業後、ロンドンへ出て印刷工として働いた彼は、名誉革命後の市内に満ちあふれていた出版に対する自由な環境を肌で感じながら、十代の終わりを過ごした若者であった。1717年、二十歳でボストンへ帰郷したジェームスは、ロンドンから持ち帰った65年前の古い印刷機材を用いて、故郷で印刷業を開業した。¹ この時彼は、父ジョサイアの依頼を受け、十二歳の弟ベンジャミン(Benjamin Franklin)を印刷工見習い兼雑用係として預かった。これが、後の建国の父のひとり、ベンジャミン・フランクリンを世に送り出した出発点であった。²

当時、ボストンの印刷業界にジェームスが入り込む余地はなく、開業当初のビジネスは決して順調なものとは言えなかった。しかし、ジョン・キャンベルの後任ボストン郵便局長、ウィリアム・ブルッカーが、1719年12月、*Boston Gazette* を創刊し、その印刷をジェームスの手に委ねたことが、彼の後の人生を決定付ける最初の幸運となった。

しかしながら、実力を伴わない幸運は、すぐに手元を離れてしまうものである。ジェームスの幸運も長くは続かなかった。年が明けた1720年、彼は突然、職を解かれ、再び生活の困窮を余儀なくされてしまうこととなる。ジェームスの印刷は、ライバル紙 *Boston News Letter* と比べて極めて劣り、読者から不評を買っていたのである。彼がロンドンから持ち込んだ古い機材では、印字の品質が不鮮明となり、これが不評の原因のひとつであった。³ 加えて *News Letter* の印刷が、当時ボストン一の評価であったパーソロミュー・グリーンによるものであったことも、ジェームスには不運であった。グリーンは他の追随を許さず、ジェームスが到底太刀打ちできる相手ではなかったのである。

ジェームスの失職後まもなく、今度はブルッカー自身が郵便局長の座を追われることになった。新たに局長に着任したフィリップ・マスグレイヴ (Philip Musgrave) は、*Gazette* の印刷をサミュエル・ニーランド (Samuel Kneeland) に任せる決断を下した。⁴

Gazette の仕事を失ったジェームスは、様々な職を転々とする生活を余儀なくされた。⁵ しかし、若い、野心に満ちたジェームスが、この段階で己の人生の梯子を放棄することはなかった。捨て身のジェームスは、一転、自ら新聞を創刊し、*Gazette* へ意趣返しをはかることを考えた。既に二紙が競合していたボストンで、三番目の新聞を創刊することは危険な賭けであり、周囲はこれを懸命に制止しようと試みた。⁶

確かにジェームスの計画は無謀であった。*Gazette* を追われたジェームスに、そもそも新聞創刊に必要な資金などあるはずもなかった。子沢山で、生涯、貧に耐え続けてきた父母を頼ることもできなかった。ところが、後に弟ベンジャミンが自伝で回顧するように、自信家で負けず嫌い、直情的な性格のジェームスが、素直にここで周囲の意見を聞き入れることはなかった。⁷ ロンドン滞在中、検閲撤廃後の出版環境を身をもって体感し、自身も大衆紙の印刷に携わっていたジェームスの脳裏には、既に成功を約束されたも同然の夢の新聞が出来上がりつつあった。それが実現すれば、まさに植民地初のことであり、既存二紙——現役引退間近と言われたジョン・キャンベルが発行する *Boston News Letter* と郵便局長発行の公報 *Boston Gazette*——は、容易に凌駕できる相手であった。時折しも、ボストンの街には、ジェームスがロンドンで味わったと同じ風が、刻一刻と激しさを増して吹き込んでいたのであった。

2

18世紀初頭ニューイングランドは、様々な方向で、ジェームス・フランクリンに挑戦のチャンスを与えていた。当時、ボストン周辺では、新たな新聞需要の兆しが見え始めていた。

名誉革命後のロンドンの変化は目を見張るものであった。イングランドで公式に出版物の検閲が廃止されたのは1695年のことであるが、この頃、植民地初の新聞を発行したベンジャミン・ハリスが、ロンドンへ帰京していた（詳しい年月日は不明）。その時目の前にあらわれた光景を、ハリスは隔世の感をもって眺めた。彼はロンドンに止まり、1699年から1706年までの間、*London Post* の発行人を務めた。そして自らも新たな新聞 (*Protestant Tudor*) を創刊した。⁸ このありさまが植民地へ波及するのは、ごく自然の成り行きであった。

またこの頃になると、ニューイングランドで生まれ育った住民の数が増え、彼らの間に地元への帰属意識が高まっていた。彼らにとって、イングランドはもはや望郷の念を抱く故郷ではなくなっていた。彼らが新聞に必要とした情報は、遠く大西洋を隔てたものではなく、地元中心の、より生活に根ざしたニュースであった。このニーズは、既存二紙においても受け入れざるを得ないほど、当たり前のこととなっていた。⁹

植民地の発展と共に、ボストンを抱えるマサチューセッツを中心として、新たな移住者が増え始

め、住民の多様化が進んでいたことも、ニューイングランドに変化をもたらしていた。住民の多様化は、信仰の多様化をも含んでいた。ピューリタン以外の住民は珍しいものではなく、彼らとピューリタンとの交流も日常の光景になっていた。例えばハリスは、1686年にボストンへの移住を決意し、市内に“London Coffee House”を開店するが、この場所は一時期、ボストンのピューリタン指導者らも通う知的サロンへと発展していた。ハリスはピューリタンではなく、敬虔なアナ・バプティストであった。

ジェームスのように、職能を身につけるため、あるいは学業を修めるために、一時期ロンドンやヨーロッパの都市で暮らした若者たちの帰郷も、ボストンに新しい風を吹き込む原動力となっていた。ロンドン滞在中、実際の印刷作業を通して、出版物への気風を肌で感じていたジェームスは、この意味でも新世紀ボストンを象徴する青年のひとりであった。将来への希望に満ちあふれていた若い彼の目に、依然として公報の域を出ない既存二紙の存在があまりに古くさく映ったのは、至極当然と言えた。

これら植民地内で顕著になってきていた数々の変化に加えて、時折しも1721年は、人々の脅威的であった天然痘 (small pox) が、マサチューセッツで大流行した年であった。ボストンの繁栄とともに、イングランドや他のヨーロッパ地域からの移住者が増えたことが、流行の原因と言われた。地元は、感染症への恐怖で大揺れに揺れた。ジェームス・フランクリン発行のボストン第三紙、*New England Courant* は、この天然痘騒動を直接の追い風として登場した新聞であった。

3

New England Courant 創刊の詳細は、本稿後段で書き記すこととして、まずは開拓初期ニューイングランドのコミュニティ成立過程のあらすじを、主としてダニエル・ブーアスティン著、*The Americans: The Colonial Experience* の助けを借りながら概括してみたい。

アメリカ発祥期において、開拓民の彼らが抱いていた「アメリカの使命」とはどのようなものであったのか——それは、「アメリカ」という巨木の根幹を臆気ながらも見つめることであり、その後のアメリカ史と、「アメリカ」の行動、「アメリカ人」の特徴、それら多くを考える手がかりの一つとなるであろう。

この視点を持って、18世紀初頭に巻き起こったボストンのざわめきを眺めてみれば、そこに窺えるものは、清教徒革命前からロンドンで続いた目まぐるしい社会変動が起こした改革の嵐と、その嵐を次なる成長への栄養源としたアメリカという若木の逞しい萌芽であった。はかなくも結実することなく散ったあだ花ではあったが、*New England Courant* とそのジャーナリズムは、このざわめきを独自の視点で記録し、生命力漲る若木が次に伸びていく方向を示唆していた。この模様をできるだけ丁寧に記述するために、本連載では都合三回に分けて同紙とその時代を振り返ることとする。

開拓初期、ニューイングランドに渡ってきたピューリタンは、多くが信仰の安息地を求めてやってきた旅人 (pilgrim) であった。忘れてならないことは、彼らの旅、すなわち巡礼が、必ずしもイングランドでの迫害から逃れるための消極的な避難ではなく、積極果敢な野心を持って挑むべきチャレンジであったと言うことである。彼らにとってアメリカとは、神の使命を実現する聖なる土地であり、神に選ばれた自分たちこそ、この地で信仰の王国を建設し、この世のものすべてが仰ぎ見る道しるべとならねばならない、とする意気揚々とした信念を抱かせる場所であった。¹⁰

おそらく、この気概を最も鮮やかに表現するのが、ジョン・ウィンスロップ (John Winthrop) の有名な説教、*A Model of Christian Charity* に表れる、「丘の上の町 (“A City upon the Hill”)」の一章であろう。1630年、ピューリタン移民を乗せて、マサチューセッツ湾植民地 (the Massachusetts Bay Colony) へ出航した、ウィンスロップ船団の旗艦アルベラ (The Arbella) 号で、リーダー、ジョン・ウィンスロップは、新訳聖書の聖句「山上の垂訓 (“Sermon on the Mount”)」を引用し、「これから上陸するマサチューセッツ湾植民地こそ、我々の信仰のモデル・コミュニティとなる場所である。それは、聖書が約束したこの世のものすべてが見上げる『丘の上の町』となることであろう」と、後のアメリカ史に残り、今も脈々と伝えられる有名な説教を行ったのである。¹¹

ウィンスロップが用いた聖書の喩えは、聞くものをして、マサチューセッツに荘厳な聖地のイメージを与え、人々に神から課せられた大いなる使命感を抱かせた。そしてそこに生まれた昂然とした希望こそが旅人の精神であり、「アメリカの使命 (American destiny)」の狼煙であった。

ダニエル・ブーアスティンは、著書 *The Americans: The Colonial Experience* の冒頭で、このウィンスロップを引きながら、次のように述べている。

THE Arbella, a ship of three hundred and fifty tons, twenty-eight guns, and a crew of fifty-two, during the spring of 1630 was carrying westward across the Atlantic the future leaders of Massachusetts Bay Colony. The ship had sailed from Cowes in the Isle of Wight, on March 29, and was not to reach America till late June. Among the several ways of passing the time, of cementing the community and of propitiating God, perhaps the most popular was the sermon. The leader of the new community, John Winthrop, while preaching to his fellow-passengers, struck the keynote of American history. “Wee shall be,” Winthrop prophesied, “as a Citty upon a Hill, the eies of all people are uppon us; soe that if wee shall deale falsely with our god in this worke wee have undertaken and soe cause him to withdrawe his present help from us, wee shall be made a story and a by-word through the world.” No one writing after the fact, three hundred years later, could better have expressed the American sense of destiny. In describing the Puritan experience we will see how this sense of destiny came into being, and what prevented it from becoming fanatical or utopian. The Puritan beacon for misguided mankind was to be neither a book nor a theory. It was to be the community itself. America had something to teach all men: not by precept but by example, not by what it said but by how it lived. The slightly rude question “What of it?” was thus, from the earliest

years, connected with belief in an American destiny. (Boorstin, 1958, pp. 3-4)

「丘の上の町」と言う、観念上の創造物を使命として、彼らが求めたことは現実の行動とその結果であった。アメリカのピューリタニズムは、極力観念論を排して、プラクティカル（実用的、実践的）な性格を帯びているとされるが、ウィンスロップの説教と後のマサチューセッツの発展には、その端緒が見事にあらわされていた。

「アメリカの使命」——この抽象的な言葉に表されるものは、自分たちの行動の結果は、自分たちが成し遂げる成果、すなわちコミュニティとその発展に具体的な形として現されるということであり、この信念は彼らの信仰に基づく真理であった。しかし同時にそれは、抽象的な概念であるが故に、様々な方向へ解釈され、進展していく運命にあった。その後の歴史に見られるアメリカ行動の背景には、中枢でこの信念が働いていた。

互いに初対面で、赤の他人の集合体に過ぎなかった彼らが、まず始めなければならなかったことは、共通の信仰、ピューリタニズムの確認と結束であった。彼らは、想像を超える忍耐力、緻密で繊細なコミュニケーション能力、そして同じ信仰を持つ者同士の揺るぎない団結力をもって、ピューリタンの使命実現に邁進した。そして形にしていっていったものが、セーラム（Salem）やボストンのコミュニティであった。彼らは、自ら進んで集会場や学校建設、道路の整備を行い、タウン・ミーティングという独自の自治制度を作り上げた。この制度はやがて、ニューイングランド全域へと広がりを見せ始めた。

こうして彼らは、他に例を見ない、ピューリタニズムを核とする独自のコミュニティを形成していった。アメリカの使命を帯びて芽吹いた若木は、荒野に深々と根を下ろしていった。最古の植民地、ニューイングランドの歴史は、その後のアメリカを決定づける重要な基盤であった。¹²

5

初期開拓民がコミュニティ建設に邁進していた頃、母国イングランドでは、ピューリタンやプロテスタント内部で種々の神学論争が渦巻き、結果、信条を異にする分派が続々と誕生していた。彼らは自然な流れとして、自分たちの向かう先をアメリカへと定めた。

しかし、一足先にマサチューセッツを中心とする地域の支配力を確立していた、ニューイングランド・ピューリタンは、これら新参者の多くを異端と見なし、悉く迫害を加えた。ニューイングランドのピューリタンは、ウィリアムス・エイムス（William Ames）やジョン・ノートン（John Norton）らの神学を基に、自らの正統神学を築き上げ、これを固持していた。当時のロンドンで一部の進歩的ピューリタンや他の信仰者らに支持されつつあった、アン・ハッチンソン（Anne Hutchinson）やロジャー・ウィリアムス（Roger Williams）の神学は、ニューイングランドではあまりに過激であり、迫害の対象となった。ニューイングランドの正統ピューリタニズムは、異論の迫害と追放によって、イングランドの神学論争や分派活動から己を守ったのである。

ブーアスティンを引用する。

The Puritans in New England were surprisingly successful for some years at keeping their community orthodox. In doing so, they also made it sterile of speculative thought. Their principal theological treatises were works by William Ames (who never saw New England) and John Norton's *Orthodox Evangelist*, a rudimentary summary of the works of English divines. In England the presbyterians and independents and levelers within Puritanism were daring each other to extend and clarify their doctrines; but we see little of this in America.

A dissension which in England would have created a new sect within Puritanism, simply produced another colony in New England. The boundless physical space, the surrounding wilderness deprived the New England ministry of the need to develop within its own theology that spaciousness, that room for variation, which came to characterize Puritanism in England. When Anne Hutchinson and her followers caused trouble by their heterodox views and unauthorized evening meetings, she was tried and "excommunicated." The result, as described by Winthrop, was that in March 1638, "she ... went by land to Providence, and so to the island in the Naragansett Bay, which her husband and the rest of that sect had purchased of the Indians, and prepared with all speed to remove unto." The dissidence of Roger Williams—the only movement within Massachusetts Bay in the 17th century which promised a solid enrichment of theory—led to his banishment in October, 1635. (Boorstin, 1958, pp. 7-8)

迫害の末、マサチューセッツから失踪したロジャー・ウィリアムスとアン・ハッチンソンは、原住民ナラガンセット族 (Narragansett tribe) から提供された土地を元に、ロード・アイランド植民地 (Colony of Rhode Island and Providence Plantations) の基盤を作り上げた人々であった。¹³ ピューリタン同様、イングランドで迫害を受けたクエーカー (Quaker; Religious Society of Friends; キリスト友会; フレンド派) は、17世紀中頃からアメリカへ向けて旅立つが、ロード・アイランドは、彼らに対しても極力、平等の精神を持って接した。政教分離を宗とするウィリアムスの神学は、ピューリタン以外の信徒を政治的に迫害することを許さなかったのである。

しかし、この徹底した政教分離こそが、ニューイングランドがウィリアムスを排除せねばならない理由であった。後にジョン・ミルトン (John Milton) と親交を結ぶ彼の神学は、当時のイングランド・ピューリタニズムの尺度ですら急進的であり、到底、ニューイングランドのスタンダードでは受け入れられるものではなかった。¹⁴

ブーアスティンは、この点について次のように語っている。

In New England the critics, doubters, and dissenters were expelled from the community; in England the Puritans had to find ways of living with them. It was in England, therefore, that a modern theory of toleration began to develop. Milton and his less famous and less reflective contemporaries were willing to debate, as if it were an open question, "whether the magistrate

have, or ought to have, any compulsive and restrictive power in matters of religion.” Such was the current of European liberal thought in which Roger Williams found himself. But Williams was banished from Massachusetts Bay Colony and became a by-word of heterodoxy and rebellion. He died in poverty, an outcast from that colony. If his little Providence eventually prospered, it was never to be more than a satellite of the powerful orthodox mother-colony. (Boorstin, 1958, p. 9)

コミュニティー建設において、指導者が最も腐心したことは、開拓民の安全と統治の安定であった。このために不可欠だった前提は、むしろ政治と信仰の強い結びつきであり、これを分離するなどという考えは、それ自体があまりに突飛と言えた。ウィリアムスの主張は、そもそも議論以前の問題であった。

ニューイングランド・ピューリタンにとって、神学上の観念論争は、文明都市ロンドンで行われる邪魔ものであった。未開の荒野を切り拓き、ロンドンでは想像すらできない、原住民や自然の驚異と日々向き合う開拓民にしてみれば、ピューリタン内の神学論争など、無用の長物であった。もしこの種の論争が始まってしまえば、ようやく産声を上げたコミュニティーが、瞬時に瓦解する恐れすら考えられたのであった。¹⁵

活発なイングランド・ピューリタンの分派活動に対して、不寛容で冷淡な姿勢を貫き通したニューイングランド神学は、それによって、コミュニティーの安定と開拓民の団結、人々のひたむきで誠実な心の涵養に寄与した。そしてそれは、ニューイングランドの発展を支える大きな精神支柱になっていった。

ブーアスティンは、さらに次のように述べている。

The leaders of Massachusetts Bay Colony enjoyed the luxury, no longer feasible in 17th century England, of a pure and simple orthodoxy.

The failure of New England Puritans to develop a theory of toleration, or even freely to examine the question, was not in all ways a weakness. It made their literature less rich and gave much of their writing a quaint and crabbed sound, but for a time at least, it was a source of strength. Theirs was not a philosophic enterprise; they were, first and foremost, community-builders. The energies which their English contemporaries gave to sharpening the distinctions between “compulsive” and “restrictive” powers in religion, between “matters essential” and “matters indifferent” and to a host of other questions which have never ceased to bother reflective students of political theory, the American Puritans were giving to marking off the boundaries of their new towns, to enforcing their criminal laws, and to fighting the Indian menace. Their very orthodoxy strengthened their practical bent. American Puritans were hardly more distracted from their practical tasks by theology and metaphysics than we are today. They transcended theological preoccupation precisely because they had no doubts and allowed no dissent. Had they spent as much of their energy in debating with each other as did their English contemporaries, they might have lacked the singlemindedness needed to overcome the dark, unpredictable perils of a wilderness. They might have merited praise as

precursors of modern liberalism, but they might never have helped found a nation. (Boorstin, 1958, p. 9)

神学の観念論争に代わって、ニューイングランドで盛んに行われていたのは、コミュニティー統治上の制度論争であった。彼らは神学そのものではなく、その神学を現実の統治に、日々の生活に、そしてコミュニティーの姿に如何に生かしていくかを議論の中心に据えた。

アメリカ・ピューリタニズムの特徴について、ブーアスティンは、複数の章にまたがって、詳細な説明を施している。そのごく一部を紹介する。

NEVER WAS A PEOPLE more sure that it was on the right track. “That which is our greatest comfort, and meanes of defence above all others,” Francis Higginson wrote in the earliest days, in New-Englands Plantation, “is, that we have here the true Religion and holy Ordinances of Almighty God taught amongst us ... thus we doubt not but God will be with us, and if God be with us, who can be against us?”

But their orthodoxy had a peculiar character. Compared with Americans of the 18th or the 19th century, the Puritans surely were theology-minded. The doctrines of the Fall of Man, of Sin, of Salvation, Predestination, Election, and Conversion were their meat and drink. Yet what really distinguished them in their day was that they were less interested in theology itself, than in the application of theology to everyday life, and especially to society. From the 17th-century point of view their interest in theology was practical. They were less concerned with perfecting their formulation of the Truth than with making their society in America embody the Truth they already knew. Puritan New England was a noble experiment in applied theology. (Boorstin, 1958, p. 5)

6

宗教は、たとえそれがいかなるものであろうとも、本質として排他性を内に秘める。信仰者にとって、己の信じる教義こそが唯一、真理に通じる道だからである。同じピューリタン内ですら異論を排除したニューイングランド・ピューリタンが行った他宗徒への仕打ちは、筆舌に尽くしがたいものがあつた。とりわけ、クエーカーに対する迫害はその典型と言えた。この地において、クエーカーへの迫害（平和主義を唱えるクエーカー側からは「殉教」）は、マサチューセッツの悲惨な歴史の一部と言えるものであつた。

マサチューセッツで布教を試みようとしたクエーカーに対するピューリタン側の措置を、ブーアスティンは実例を挙げて説明している。

One of the most persistent of the martyrs was Christopher Holder, “valiant apostle of New England Quakerism,” who had arrived in 1656 from England to preach the gospel of his sect. In Salem, one Sunday morning in September 1657, he was bold enough to speak a few words after the

minister had done. He did not get very far before someone seized him by the hair, and “His Mouth violently stopp’d with a Glove and Handkerchief thrust thereinto with much Fury, by one of your Church-Members And Commissioners.” Although he had already been at least once expelled, he and his companion had continued their preaching. They were conveyed to Boston, where the exasperated Governor and Deputy-Governor of the colony inflicted on them a brutal punishment which went even beyond all existing laws. Merely reading the account is strong medicine, but it contributes to our understanding of the price the Quakers sought to pay for their Truth. First the two Quakers were given thirty stripes apiece with a three-cord knotted whip, during which one of the spectators fainted. Then they were confined to a bare cell, without bedding, for three days and nights without food or drink. After that they were imprisoned during nine weeks of the New England winter without any fire. By special order the prisoners were whipped twice each week, the first time with fifteen lashes and each succeeding time by three additional. Having miraculously survived this ordeal, Holder took ship for Barbados, where he spent the remainder of the winter before returning to Rhode Island to preach his gospel without molestation. But this did not satisfy him. In August 1658 he was arrested in Dedham, Massachusetts, and again taken to Boston, where one of his ears was cut off. (Boorstin, 1958, pp. 37-38)

ピューリタン支配下のマサチューセッツでは、他宗派の布教や信仰を法令で禁じ、違反するものには厳罰で臨んだ。禁止令に反して、ピューリタンからクエーカーに改宗し、迫害の末、死刑に処せられたメアリー・ダイヤー (Mary Dyer) の殉教は、この顕著な例であった。¹⁶

ブーアスティンは、ピューリタンがこうした他宗徒への迫害を繰り返した動機の背景を、次のように記している。

The New England Puritan leaders were not sadists. But they too were single-minded men; they had risked everything and traveled three thousand miles for their own opportunity. They wanted to be let alone to pursue their orthodoxy and to build Zion according to their model. (Boorstin, 1958, p. 38)

彼らが幾多の危険を冒して未開の地へと旅立った理由を、すべて単純に「信仰の自由を求めての巡礼」とするわけにはいかなかった。彼らの信仰の自由は、彼らのみのものであり、他宗徒の自由は含んでいなかった。そしてそれが故に彼らの多くは、新天地アメリカを独占し、自分たちのみによって切り拓いていくことを望んだ。¹⁷

アメリカとは、イングランドやヨーロッパで彼らを縛り付けていた過去のしきたりや習慣、制度、階級からの解放でもあった。¹⁸ そしてその解放が行き着く先に、彼らの多くが夢見たものは、思いのままになる富の追求であった。

ウォルター・イザックソン (Walter Isaacson) は、著書 *Benjamin Franklin: An American Life* の中で、この点を次のように語っている。

Among the greatest romantic myths about America is that, as schoolbooks emphasize, the primary motive of its settlers was freedom, particularly religious freedom.

Like most romantic American myths, it contains a lot of truth. For many in the seventeenth-century wave of Puritan migration to Massachusetts, as in the subsequent migratory waves that made America, the journey was primarily a religious pilgrimage, one that involved fleeing persecution and pursuing freedom. And like most romantic American myths, it also glosses over some significant realities. For many other Puritan migrants, as for many in subsequent waves, the journey was primarily an economic quest.

But to set up such a sharp dichotomy is to misunderstand the Puritans--and America. For most Puritans, ranging from rich John Winthrop to poor Josiah Franklin, their errand into the wilderness was propelled by considerations of both faith and finance. The Massachusetts Bay Colony was, after all, established by investors such as Winthrop to be chartered commercial enterprise as well as to create a heavenly "city upon a hill." These Puritans would not have made an either/or distinction between spiritual and secular motives. For among the useful notions that they bequeathed to America was a Protestant ethic that taught religious freedom and economic freedom were linked, that enterprise was a virtue, and that financial success need not preclude spiritual salvation.

Instead, the puritans were contemptuous of the old Roman Church's monastic belief that holiness required withdrawal from worldly economic concerns, and they preached that being industrious was heavenly as well as earthly imperative. What the literary historian Perry Miller calls "the paradox of Puritan materialism and immateriality" was not paradoxical to the Puritans. Making money was a way to glorify God. As Cotton Mather put it in his famous sermon "A Christian at His Calling," delivered five years before Franklin was born, it was important to attend to "some settled business, wherein a doing good for others, and getting good for himself." The Lord, quite conveniently, smiled on those who were diligent in their earthly calling and, as Poor Richard's almanac would later note, "helped those who helped themselves." (Isaacson, 2004, p. 7)

多くにとって、信仰と富の追求は、二分割の相克関係ではなく、表裏一体のものであった。ジェームス・フランクリンとベンジャミン・フランクリン——フランクリン兄弟の父、ジョサイア・フランクリンは、この典型的な開拓民と言えた。そして、ジョサイアが二番目に迎えた妻、アバigail・フォルジャーもまた、篤い信仰心と現実生活の向上を一体と見なして努力を重ねた、ピーター・フォルジャーを父としていた。ピーター・フォルジャーは、その後のナンタケットで活躍するフォルジャー一族の始祖となる人物であった。¹⁹

7

純粋な信仰心と富の追求——マサチューセッツを母なる植民地とするニューイングランド一帯は、着実に発展を遂げていった。そしてその発展と共に、コミュニティはその遺産を堅固に守ろうとする独自の保守土壌を形成していった。

しかし一方で、神学論争を嫌い、寛容と多様性を拒み続けたこの地の文化は、自然に単色となり、新鮮味に欠け、発展性の乏しいものとなっていった。新しい時代は、ピューリタニズムの副作用である固陋で硬直的な部分を、ニューイングランドの次なる発展を妨げるものとして認識し始めていた。

この新しい時代の起源は、清教徒革命から名誉革命へと、イングランドで続いた目まぐるしい社会変動をエネルギー源とした民衆の声、民衆の求めであった。相次ぐピューリタン分派や宗派の誕生もまた、この新しい時代の産物であった。民衆の声は瞬間にロンドン市内に暴風となって吹き荒れ、大西洋を越えて、ニューイングランドのピューリタン・コミュニティへと達していた。暴風は途絶えることなく吹き荒れ、エスタブリッシュメントが、如何に堅固な保守性を維持していたとしても遮断できるものではなかった。

新世紀に入ってから地域の動揺に、ニューイングランドのエスタブリッシュメントは、警戒を強めた。ピューリタン教会にとって、植民地制度の核である宗教観の多様化がこれ以上進むことは、看過できない問題であった。迫害と追放を過去のものとした彼らは、出版物の監視に力を注いだ。自由な刊行は心と思想の自由化に繋がる——主要な伝達方法が、新聞、ピラに代表される出版物だった当時、教会が民間の出版物に並々ならぬ警戒心を抱いていた理由であった。

コミュニティの安定を宗とし、教会と表裏一体の関係が続いた植民地当局も、出版物を厳しく監視した。本国の情勢に呼応する必要もなく、さほど干渉を受ける必要もない、植民地の自治政府は、17世紀末からロンドン市内で顕著になっていた民間出版物とそれに伴う民衆の動きを、コミュニティ基盤を破壊する危険な要素と見なした。ベンジャミン・ハリスの *PUBLICK OCCURRENCES Both FOREIGN and DOMESTICK* (1690年) が、記事中の些細な表現を問題とされ、本国の政策に異を唱えたとして創刊直後に摘発を受けたのは、この意味で当然と言えた。

しかし、ジョン・ウィンスロップの説教から90年の時を経て、時のうねりは、教会や当局の方針を大きく凌ぎ、確実に植民地を変えていった。植民地の多様化とさらなる発展を求める声は、堅固な一体関係を維持してきた政府と教会との間に亀裂を生じさせた。18世紀初頭、ニューイングランドの空気は、刻一刻と変化していた。

この時代、ペンシルベニアやニューヨークなど、当時新興と言われた植民地が目覚ましい発展を遂げていく。その背景には、時代が求める多様性への寛容があった。新しい時代は、ニューイングランドに新旧の交代を促しており、ジェームス・フランクリンは、その申し子であった。

そのジェームスに、1721年、慈雨とも思える幸運が転がり込んできた。ボストン、マサチューセッツをパニックへと追いやった天然痘の大流行である。ボストンの繁栄に魅せられた、イングランドやヨーロッパ地域からの移住者が持ち込んだとされる感染症は、新しい時代の暴風に揺れ動いていた教会と政府の関係をさらに大きく揺り動かした。ジェームス・フランクリンは、このパニックを好機と見なし、アメリカの次の時代を予見する新しいジャーナリズムの発信を計画していた。

17世紀、18世紀のアメリカで、天然痘の流行は人々の脅威であった。イングランドやヨーロッパ大陸では、天然痘は幼児期にかかる伝染病として既に知られ、成人を迎えた者の大半は免疫保有者と言っても良かったが、アメリカでは免疫を持つ者の数は限られていた。

ブーアスティンはこの点について次の記述をしている。

Public concern over a disease depends less on the actual mortality than on the dramatic intensity with which it is impressed on the public. Although smallpox probably caused fewer fatalities among white settlers in America in proportion to the population than it had in England, it occurred here almost exclusively in the spectacular form of epidemics. During the 17th and 18th centuries in England and on the European continent, smallpox was a common disease of childhood. By the time a person had grown up he had almost certainly been exposed to it and had either proven himself immune or had acquired immunity by surviving the disease. Smallpox was therefore not an epidemic disease among adults in Europe. But in America, where the disease had not existed until it was introduced by Europeans, it was much less widespread. Many inhabitants lived through childhood without having been exposed. (Boorstin, 1958, pp. 219-220)

天然痘は古くから、その強い感染力とともに、人々を死に至らしめる疫病として知られ、治癒した後も顔面に癍痕が残る恐ろしい病として忌み嫌われていた。病状に迷信や俗伝が絡み合い、人々は天然痘の脅威に震えおののいた。医師や職人など、特定の技能を持つ専門職が地域に少なかったこの時代、ひとたびある専門職が倒れてしまえば、住民の生活に直接支障が出ることも多く、天然痘の流行は大いに人々を悩ませた。当時、裕福な家庭が、子息の高等教育をイングランドで受けさせることを避けた理由も、現地での天然痘感染への懸念があった。免疫を持たなかったアメリカ原住民は、天然痘で最大の被害を被った犠牲者であった。²⁰

ジェームス・フランクリンが *New England Courant* を創刊する1721年は、この天然痘がボストンで大流行した年であった。推定人口約11,000～12,000人のボストン市内で、罹患者の報告は6,000件に上り、死者の数は800～850名を数えていた。²¹ 地域の宗教指導者であり、自然科学や医学の分野でも類い希なる才能を発揮したコットン・マザー (Cotton Mather) は、天然痘への対応策として植民地初の人痘接種 (inoculation) の有効性を説いた。

マザーの主張に強硬に反対する意見も表明されていた。ボストン唯一の医学学位保有者、ウィリアム・ダグラス (William Douglass) はそのリーダー的存在であった。当時、イングランドなどで実験的に行われていた人痘接種は、罹患者の皮膚やかさぶたを直接擦りつけて行うものであり、ダグラスはこの場合、適切な措置を怠れば、かえって致死率を高めてしまうと主張したのである。²² 事実、彼の指摘通り、人痘接種は感染による罹患者と比べて致死率こそ低いものの、慎重な処置を求められる方法であり、18世紀アメリカでは、常に論争的であった。より安全性の高い牛痘法

を用いたワクチン接種（vaccination）に至るまでには、人々はエドワード・ジェンナー（Edward Jenner）の登場を待たねばなかった。

同じく接種反対派のジョン・チェックリー（John Checkley）は、英国国教会徒で反ピューリタン、反マザー父子の急先鋒として有名な人物であった。ピューリタン支配の崩壊を狙っていたチェックリーが、天然痘問題に揺れるこの機を見逃すはずはなかった。彼は反人痘接種派のリーダー、ウィリアム・ダグラスと組み、コットン・マザーらピューリタン指導者の接種の薦めに真っ向から反対する陣営を組織していった。

天然痘への対応を巡って、ボストンは二分された。新聞発行を計画していたジェームス・フランクリンにとって、この天然痘論争は格好の話題であった。先行二紙、中でもとりわけ、ジェームスの宿敵 *Boston Gazette* は、マザーらの寄稿を中心に、接種のすすめに同調したコラムや記事で占められており、接種推進派の新聞と言っても過言ではなかった。これが人々の不満を呼んでいたことを知ったジェームスは、反対派のチェックリーやダグラスら誘いに応じ、彼らのグループに飛び込んだ。

印刷技術を持つジェームスの加入は、チェックリーらにとって好都合であった。それまで *Boston News Letter* 紙上で主張を繰り返していた彼らは、自分たちの自由になる新聞を必要としていたのであった。ジェームス・フランクリンにとっても、チェックリーやダグラスからの誘いは、願ってもないことであった。自らを解雇した *Boston Gazette* に対抗する新聞を創刊しようにも、彼の手元にその資金などあるはずはなかった。発行人に求められる知識と経験、文章力もこの頃のジェームスに備わっていなかった。

デイヴィッド・A・コーブランド（David A. Copeland）は、この点について以下の指摘をしている。

The controversy concerning inoculation captured center stage in Boston's press in August 1721 with the introduction of the *New England Courant*, Boston's third newspaper, which was printed by James Franklin with the assistance of his apprentice brother, Benjamin. One of the principal reasons for the establishment of the *Courant* was to fight inoculation.

The Franklins served primarily as the paper's printers; its financial backers included John Checkley, who was a staunch supporter of the Church of England. Checkley's disdain of inoculation no doubt was fueled by his dislike for Puritans and Mather. He and Douglass wrote most of the anti-inoculation articles that appeared in the *Courant*. (Copeland, 2000, p. 14)

ブルッカーによって与えられた、*Boston Gazette* 印刷人が最初の幸運とすれば、天然痘騒動とダグラス、チェックリーらとの出会いは、ジェームスに訪れた第二、第三の幸運と言えた。それが彼の人生にとって真に幸いなことであったか否かは別として、少なくとも失意のどん底にあった彼の目には、紛れもなく己の夢を実現してくれる恵みの雨に映った。新聞発行のために必要な資金は、チェックリーやダグラスらが共同で出資した。そのみならず、創刊当初の *New England Courant*

では、人痘接種に関する批判記事の殆どが、チェックリー、ダグラスらの執筆であった。²³

9

晴れて新聞発行人となったジェームスは、自らのロンドン体験を新聞に生かすことを考えていた。彼の腹中にあった新聞は、日々のニュースを伝えるジャーナルというよりもむしろ、ロンドン市内で人気を博していた読み物としての新聞であった。中でも彼は、人気の風刺新聞、*London Spectator* を手本として、ボストンで娯楽紙の旋風を巻き起こすことを狙った。²⁴

創刊号で姿を消した *PUBLICK OCCURRENCES Both FORREIGN and DOMESTICK* を除けば、ボストン市内で三番目、植民地アメリカでも第四の週刊新聞、*New England Courant*（創刊号：両面刷り1枚）がここに誕生した。他の二紙、*Boston News Letter* と *Boston Gazette* が、当局の承認を得た公式新聞（“published by Authority”）であったのに対し、*Courant* は未承認のままの創刊であった。²⁵ ちなみに植民地第三の新聞は、*Boston Gazette* と同年の1719年、アンドリュー・ブラッドフォード（Andrew Bradford）が、フィラデルフィアで創刊した *American Weekly Mercury* であった。²⁶

以下、発行人ジェームス・フランクリン、*New England Courant* 創刊号全文（1721年8月7日号）を引用する。（Appendix：創刊号第一面（表面）イメージ）

THE New England Courant.

Monday, August 7, 1721.

Homo non unius Negotti: Or, Jack of all Trades.

It's a hard Case, that a Man can't appear in Print now a Days, unless he'll undergo the Mortification of Answering to ten thousand senseless and Impertinent questions like these, Pray Sir, from whence came you? And What Age may you be of, may I be so bold? Was you bield at Colledge Sir? And can you (like some of them) square the Circle, and cypher as far as the Black Art? &c. Now, tho' I must confess it's something irksome to a Man in hast, thus to be stop'd at his first setting-out, yet in Compliance to the Custom of the Country where I now set up for an Author, I'll immediately stop short, and give my gentle Reader some Account of my person and my rare Endowments.

As for my Age, I'm some odd Years and a few Days under twice twenty and three, therefore I hope no One will hereafter object against my soaring now and then with the grave Wits of the Age, since I have dropt my callow feathers, and am pretty well fledg'd: but if they should tell me that I am not yet fit nor worthy to keep Company with such Illustrious Sages, for my Beard do'sn't yet reach down to my Girdle, I shall make them no other Answer than this, *Barba non facit Philosophum*.

I make no question my gentle Readers, but that you're very Impatient to see me entirely dissected, and to have a full View of my outward as well as inward Man, but as I stopt short just now, merely to oblige you, so I shall stop as short here, and give no farther Account of my self until this Day fortnight, when you shall have a farther Account of this useful Design, and of my great endowments of Body and Mind.

And to engage the Word to converse farther with me, they'l find me in the good Company of a certain set of men, of whom I hope to give a very good Account,

Who like faithful Shepherds take care of their Flocks,
By teaching and practising what's Orthodox,
Pray hard against Sickness, yet preach up the POX!

N. B. This Paper will be published once a Fortnight, and out of mere Kindness to my Brother-Writers, I intend now and then to be (like them) very, very dull; for I have a strong Fancy, that unless I am sometimes flat and low this Paper will not be very grateful to them.

abnormis sapiens.- Hor.

At the Request of several Gentlemen in Town: A Continuation of the History of Inoculation in Boston, by a Society of the Practitioners in Physick.

The bold undertaker of the Practice of the Greek old Women, notwithstanding the Terror and Confusion from his Son's Inoculation-Fever, proceeds to inoculate Persons from Seventy Years of Age and downwards.

The Select Men (or Managers of the Town Affairs) in duty bound to take Cognizance of the Matter, desire a Meeting of all the Practitioners in Town, to have their Opinion whether the Practice ought to be allowed or not; they Unanimously agreed that it was rash and dubious, being entirely new, not in the least vouched or recommended (being merely published, in the Philosophick Transactions by way of Amusement) from Britain, tho' it came to us via London from the Turk, and by a strong viva voce Evidence, was proved to be of fatal & dangerous Consequence. B---n is desired by the Select Men to desist.

Notwithstanding the general Aversion of the Town, in Contradiction to the declared Opinion of the Practitioners, in Opposition to the Selectmen, and in Spite of the discouraging Evidences relating to this Practice, Six Gentlemen of Piety and Learning, profoundly ignorant of the Matter, after serious Consideration of a Disease, one of the most intricate practical Cases in Physick, do on the Merits of their Characters, and for no other reason, with a Vox prateriaq; nihil, assert, &c. If This Argument, viz. their Characters, should prevail with the Populace (tho' here I think they have missed of their

Aim) who knows but it may oblige some profane Person to canvas that fort of Argument. I think their Character ought to be sacred, and that they themselves ought not give the least Occasion to have it called in question. They set up for Judges of a Man's Qualifications in the Practice of Physick and very lavishly bestow all the fulsome common Place of quack Advertisements. One would think they meant some Romantick Character, something beyond that of candid Sydenham, the sagacious Radcliff, or the celebrated Mead: they might indeed in respect of his moral and religious Qualifications, which lay properly under their Cognizance, have said, that he was a modest, humble Man of Continency, Probity, &c.

At first reading of this Composure, many were persuaded, that it was only a piece of Humour, Banter,

Burlesque, or Ridicule on the Inoculator, &c. in treating a Character of low Life with a sort of strain'd Sublime, in a P--t manner; but were surprized to find two Gentleman, not in the Question, having given no Shadow of Offence, called Illiterate, Ignorant, &c. This (as they prophesied) the Town takes very much amiss. B--n was represented in a soft Manner, as illiterate, ignorant, rash, &c. only with respect to the Small Pox, and the dubious, dangerous Practice of Inoculation; these Gentleman are called so in gross. Why should Gentleman otherwise well qualified be called illiterate, Ignorant, &c. because they did not idle away four Years at Colledge, as some of our learned Men have done?

The Operation itself is not much greater than Bleeding, Blistering, &c. to the Eye; and here they rest, and form a prejudice in Favour of it; not proceeding farther to consider seriously the Evidences of its dismal Consequences, and Instances amongst ourselves of the violent high Fevers it hath prodced. Old Mr. W--b in a few Hours underwent the hot Service of bleeding Vomiting, Blistering, Poultices, &c. and narrowly escaped with his Life. Is this no more than Bleeding or Blistering? Infatuation I think is like to be as Epidemick a Distemper of the Mind, as at present the small Pox is of the natural Body.

Westfield, July 19.

Mr. Daniel Bagg from Albany reports that there has lately been a great Fire at Quebeck, by which 150 Houses are laid in Ashes.

Boston, August 2.

At a Town's Meeting of the Freeholders and other Inhabitants of the town of Boston (legally Warn'd) for electing four Gentlemen to serve them in the great and general Court or Assembly to be held in Boston, on the 23d instant, John Clark, Elisha Cook, William Hutchinson Esqrs; and Mr. William Clark Merchant, were by a great Majority chosen their Representatives.

On last Thursday Morning sixty odd soldiers went on Board the Transport from Castle William, being part of those Troops which were raised by the Government, to check the daring Insults and intended Hostilities of the eastern Indians, and by eleven at Noon they sailed from Nantucket. It is not doubted, but that they reached Arrowsick by the next Day in the Evening, the Wind blowing fresh at South-west and West South-west during that interval.

The whole quota design'd for the Expedition will (in all likelihood) be there in a few Days, and there is no question, but that (by the Blessing of God) such a Numbers of Troops, so well equipt and led by such Officers, will be more than sufficient to put a stop to the threatening Danger, and bring the Indians to our own Terms.

Nothing can be more grateful to those poor, affrighted Strangers in those Parts than this well-timed Expedition, for it cannot be imagin'd with what Horror and confusion those poor People were siezed, when they received the cruel (but unexpected) Menaces of those treacherous Barbarians.

Boston, August 5.

His Excellency the Governour having issued out a Proclamation to make Vessels perform quarentine that come from France, &c. The following Letter from a physician at Aix (giving an Account of the Plague) may not be amiss.

The Contagious Distemper, which has became the Reproach of our Faculty here for above a Month past, is more violent than that at Marseilles; it breaks out in Carbuncles, Buboës, livid Blisters, and purple Spots; the first Symptoms are grievous Pains in the Head, Consternation, wild Looks, a trembling Voice, a cadaverous Face, a coldness in all the extreme Parts, a low unequal Pule, great Pains in the Stomach, Reachings to Vomit, and these are follow'd by Sleepiness, Deliriums, convulsions, or Fluxes of Blood, the Forerunners of Sudden Death. In the Bodies that are open'd, we find Gangrenous Inflammations in all the lower Parts of the belly, Breast and Neck. Above fifty Persons have died every Day for three weeks past in the Town and Hospitals. Most of them fall into a dreadful Phrenzy, so that we are forc'd to tie them.

Boston, Aug. 7. Entered Inwards.

Samuel Northey Sloop Sarah and Mary, Edward Limington Richard and Elizabeth, John Snoad, Seconer Ann, & John Rows Sloop Speedwell from North Carolina, Rich Foster Briganteen Adventure and Richard Thomas Briganteen Hauk from Surranam, Francis Fowles Snow George from Bristol, Joshua Pickman Pink Lark, and William Scot Ship Eagle from London, and Robert Butler Ship Margaret from the Isle of May.

John French Ship Barbadoes Merchant, and John Stevens for New Hampshire, John Sampson, Charles Whitfield, and James Cahoon for Newport, Peter Murdoch, and Jer Attwater for

Connecticut, John La Goss Sloop Tryal, & Francis Bignals Sloop Gray bound for Leward Islands, Jeremiah went for St. Christophers, William Mason Sloop Pelican for Maryland, Roger Dench and Peleg Durfie for Newfoundland, and Samuel Dolly for North Carolina.

Thomas Elison Sloop Joseph for New York, Joseph Farrington Ship John and Mary for Leward Islands, John Dauvergue Ship Durel for the Bay of Biscay, William Brocks Ship Sarah for West Indies, Nehem. Done Sloop Mary Ann for Barbados, Joseph Bissel Sloop Dove for Annapolis Royal Mal. Salter Sloop Fisher for North Carolina, Robert Butler Ship Margaret for London.

BOSTON: Printed and Sold by J. Franklin, at his Printing House in Queen Street, over against Mr. Sheaf's School, Where Advertisements are taken in. (*The New England Courant*, 1721/8/7)

10

New England Courant は、早速、既存のボストン二紙、*Boston News Letter* と *Boston Gazette* を皮肉った。文中、“N. B. This Paper will be published once a Fortnight, and out of mere Kindness to my Brother-Writers, I intend now and then to be (like them) very, very dull; for I have a strong Fancy, that unless I am sometimes flat and low this Paper will not be very grateful to them.” は、二紙の紙面内容への明らかな嘲笑と挑戦であった。創刊早々、*Courant* は自らの方針について、「退屈でつまらないライバル紙が嫌がる面白い新聞」を目指す、極めて攻撃的な宣言を紙面に掲げたのであった。

当初の計画通り、*Courant* の大部分は、投書や寄稿を中心とした読み物で占められ、出来事の記述や情報通知など、他紙では主要部分として扱われていた部分は、最後尾に体裁を繕うように載せられる程度であった。こうした読み物中心の新聞は、*Courant* が植民地で先鞭をつけたものであり、その後の18世紀アメリカにおいても、異色の存在であった。前稿で述べたように、新聞に限らず、その語源が示すとおり、当時のジャーナリズムは、「日々の記録（ジャーナル；journal）」としての「事実の拠り所」の役目を担うものとしてのみ認知されていた。印刷人や出版者の仕事の多くが、日の出、日没時刻や祝祭日、歴史的イベント、諺の類を記載した生活暦（almanac）であったことは、これを明確に物語るものであった。²⁷ これに反して、世相を風刺し、読み物と娯楽を中心とした *New England Courant* の存在は、植民地アメリカでひととき異彩を放つものであった。²⁸

植民地発の公式新聞を創刊し、アメリカ・ジャーナリズムの父を自任するジョン・キャンベルは、即刻、自らの *Boston News Letter* 紙上（1721年8月14日号）で、新聞戦争（“newspaper war”）を宣言し、ジェームスとの論争を開始した。この模様について、フレドリック・ハドソンは、*News Letter* の引用と共に、次の記述を行っている。

On the issue of the *Courant*, it was evident Franklin intended to make it a readable paper.

Speaking of the *News-Letter* in his first number, he asserted that it was “a dull vehicle of intelligence.” This was considered so severe by Campbell that it completely aroused the old editor, and a broadside, in answer, in Latin and English, appeared in the *News-Letter* on the 14th of August, 1721:

On Monday last the 7th Currant, came forth a Third Newspaper in this Town, Entitled, The New England Courant, by *Homo non uni us Negotii*; Or Jack of all Trades, and it would seem, Good at none; giving some very, very frothy fulsome Account of himself, but lest the continuance of that style should offend his readers; wherein with submission (I speak for the Publisher of this Intelligence, whose endeavours has always been to give no offence, not meddling with things out of his Province.) The said Jack promises in pretence of Friendship to the other News Publishers to amend like soure Ale in Summer, Reflecting too, too much that my performances are now and then, very, very dull, Misrepresenting my candid endeavors (according to the Talent of my Capacity and Education; not soaring above my Sphere) in giving a true and genuine account of all Matters of Fact, both Foreign and Domestick, as comes any way well Attested, for these Seventeen Years and an half past. It is often observed, a bright Morning is succeeded by a dark Rainy Day, and so much Mercury in the beginning may end in *Album Gracum*. And seeing our New Gentleman seems to be a Scholar of Academical Learning, (which I pretend not to, the more my unhappiness; and too late to say, *O mihi prateritos referat si Jupiter Annos*) and better qualified to perform a work of this Nature, for want whereof out of a Design for publick good made me at first at the Sollicitation of several Gentlemen, Merchants, and Others, come into it, according to the Proverb, thinking that half a Loaf was better than no Bread; often wishing and desiring in Print that such a one would undertake it, and then no one should sooner come into it and pay more Yearly to carry it on than the Publisher, and none appearing then, nor since, (others being judges) to excell him in their performances, made him to continue. And our New Publisher being a Schiller and Master, he should (me thinks) have given us (whom he terms low, flat and dull) Admonition and told one and the other wherein our Dullness lay, (that we might be better Proficients for the future, Whither in reading, hearing, or pains taking, to write, gather, collect and insert the Public Occurrences) before publick Censure, and a good example to copy and write after, and not tell us and the World at his first setting out, that he'll be like us in doing as we have done. *Turps est Doctori cum culpa nedarguit ipsum*. And now all my Latin being spent excepting what I design always to remember *Nemo sine crimine vivit*, I promise for my part so soon as he or any Scholler will Undertake my hitherto Task, and Endeavours, giving proof that he will not be very, very Dull, I shall not only desist for his Advantage, but also so far as capable Assist such a good Scribe. (Hudson, 1873, by Arkose Press, 2015, pp. 61-62 文中 *Boston News Letter* (1721年 8 月 14 日号) の部分は二次使用)

New England Courant の現存コピーは限られており、キャンベルの指摘に対してジェームスが行った反論部分は、本稿執筆時現在、未だ見つかっていない。ジェームスの反論は、わずかに *News Letter* 紙上でキャンベルが記述した箇所から推察できるのみである。よって本稿では、ハドソンの文献に掲載された *Boston News Letter* を二次使用した。²⁹

キャンベルが紙上で新聞戦争を宣言するのは、今回が二度目のことであった。最初の戦争 (*Boston News Letter vs. Boston Gazette*) は、郵便局長を解任されたことへのキャンベルの意趣返しに近いものであり、紙面内容について争ったものとは言えなかった。しかし、今回の *Courant* の紙面を巡るジェームス・フランクリンとの論争は、新聞とはいかなるものかを問う、大いに意義のあるものであった。後世の研究でも、この両者によるペンの戦いは、アメリカ・ジャーナリズム史上初の新聞戦争と言われている。³⁰

フレドリック・ハドソンは、この点について様々にコメントを残している。その一部を紹介する。

The “war of the papers” did not have its origin on this continent. Although it has been more violent here than in any other country, leading to duels and street-fights. It began in England as far back as 1642. Previously, the wits of the theatres and coffee-houses made butts of the newspapers. The war was the first sign of intellectual vitality in the Press. It was a conflict of brains. Those editors who accuse others of being villains, liars, forgers, blasphemers in our day, are not originals. Such epithets were applied to the *Mercurius Aulicus* and *Mercurius Aquaticus* by the *Mercurius Britannicus* in 1642, when the editor of the latter said, “I have discovered the lies, forgeries, insolencies, impieties, prophanities, blasphemies of the two sheets.” Our modern pen-warriors use no stronger expressions. They are little more sententiously thrown at each other. They use one epithet at a time. That is all the difference. (Hudson, 1873, by Arkose Press, 2015, pp. 62-63)

It vitalized the press. Abuse, like everything else can be overdone. It will correct itself. All difference of opinion is healthy. All elements need disturbance. If a newspaper goes too far in its criticisms, it suffers. Other newspapers do not. All trades and professions differ in views and in opinion of each other. There is no more *esprit du* [sic] *corps* among clergymen, lawyers, physicians, or merchants, than among editors. Journalists parade their jealousies and differences on the public clothes-line, where every body can see them. They wash their “dirty linen” before the people, and in the most exposed places. Other professions simply use their own premises for its purpose. (Hudson, 1873, by Arkose Press, 2015, p. 63)

「ジャーナリズムは多様でなければならず、意見や見解の違いがあれば、読者・民衆の前で堂々と論争を繰り広げなければならない。論争のないジャーナリズムなど、意味を持たない。広く民衆のための公器がジャーナリズムであり、その機能を果たすためにも、論争は決して避けてはならない」。17世紀中葉のイングランドでの実際の論争を例に、「ペンの戦い」の意義を語ったこの文章が、19世紀アメリカを代表するジャーナリスト、ハドソンの名著に記されていることの意味を、本稿は確ととどめておく。

数週間続いたジェームスとキャンベルの論争は、1721年12月末、キャンベルの引退とともに幕を閉じた。これを境に *Boston News Letter* の発行人は、ジョン・キャンベルからバーソロミュー・グリーンへと引き継がれたのである。³¹ 植民地時代のアメリカ・ジャーナリズムの大きな転換期であり、新しい時代の訪れを感じさせる新旧交代的一幕であった。

11

この時代のジャーナリズムの底流に神学が流れていたように、当時の医学もまた、信仰と不可分であった。コットン・マザーは、アメリカ医学への多大な功績で知られるが、彼の思考の根本原則は、あくまでもピューリタン信仰にあった。

ダニエル・ブーアスティンは、マザーが著した医学刊行物、*The Angel of Bethesda* を引用しながら、マザーの医学とピューリタニズムとの密接な関係を説明している。

Mather's interest in diseases was probably sharpened by his Puritan theology, with its emphasis on original sin and on the dark dualism of man's nature. In a devious way the Puritan emphasis on sin thus seemed to reënforce the empirical emphasis of American science; it may even have helped liberate American medical practice from the dogmatism of their learned European contemporaries. To Mather, at least, this connection of ideas seemed obvious enough; he explained at the beginning of his first chapter:

Lett us look upon Sin as the Cause of Sickness. There are it may be Two Thousand Sicknesses: and indeed, any one of them able to crush us! But what is the Cause of all? Bear in Mind, That Sin was that which first brought Sickness upon a Sinful World, and which yett continues to sicken the World, with a World of Diseases.(Boorstin, 1958, p. 222)

信仰に根ざした医学論は、勿論、マザー固有のものではなかった。医学史を概観すれば、病気とその治療において、宗教が如何に重要な要素であったかが容易に見て取れる。古来、洋の東西を問わず、医学・医術と宗教は切り離せるものではなかった。こうした環境下、ひとたび病の治療法を巡る論争が起これば、その矛先が論争相手の信仰へと向かったのは、決して不思議なことではなく、むしろ自然なことであった。

加えて、疾病対策が、病理学によるものではなく、臨床の経験則のみを基本としていたことも、この時代の感染症論争をより複雑で感情的なものにしていった。そこには一般民衆のみならず、専門家、有識者の間ですら、ややもすれば、感情的な罵り合いへと発展する危険性が付きまっていた。

マサチューセッツの天然痘の場合、コットン・マザーの人痘接種論は、1706年に自身の奴隷オネシマス（Onesimus）から聞いたアフリカでの実践談を基にしていた。対するウィリアム・ダグラスは、このオマシネスの逸話を一笑に付した。ダグラスは、人痘接種がイングランドにおいてすら未だ実験段階にあり、他のヨーロッパ諸国を含めて、文明地域で十分な臨床結果を伴わない以上、マザーの勧めは、未開の地に住む異教（邪教）徒の慣習を模倣することになると主張したのであった。³²

批判の矛先は、マザーを含め、人痘接種を推進しようとした人々に対する倫理的、人格的批難へと傾いていった。ダグラスにとって、人痘接種は医学療法ではなく、あくまでも異教徒の使う非倫

理的な悪魔の業だったのである。

ブーアスティンは、この様子について、次のように記している。

American progress against smallpox began when Mather publicly appealed to the physicians of Boston in early June 1721 to try inoculation to protect the community. He set off a violent controversy. As a whole the learned doctors—led by the splenetic Dr. William Douglass, the only physician in the city with a medical degree—opposed the experiment. They were understandably annoyed that laymen should try to tell them how to practice their art, and should urge techniques borrowed from “the Mussel-men, & faithful people of the prophet Mahomet.” They did have the solid objection that the practice, as then crudely conducted, actually tended to spread the disease. But they leaned heavily on theological objections: to inoculate, they said, would violate “the all-wise Providence of God Almighty” by “trusting more the extra groundless Machinations of Men than to our Preserver in the ordinary course of Nature.” (Boorstin, 1958, p. 224)

現代でも、感染症の流行は常に民衆の耳目を集め、往々にしてデマや根も葉もない噂話が駆け巡るものである。18世紀ニューイングランドにおいては、これに信仰上の感情論が絡み合い、コミュニティはパニックの様相を呈していた。死に至らしめる可能性のある感染症の恐怖と、治癒後に残った皮膚への癍痕は、天然痘のイメージを必要以上に恐ろしいものに変え、医学知識も科学的理解力も乏しかった人々を差別と偏見の渦中に放り込んだ。

秩序と安定を守るはずの出版規制も、この騒動には殆ど効力を失っていた。*PUBLICK OCCURRENCES* から30余年の時間を経過し、植民地の出版規制は実質上、有名無実となっていた。³³ 当局未承認のビラやパンフレットが限りなく印刷され、連日市中にばらまかれた。これら印刷物は、パニックの渦中にあった民衆感情をさらに煽り立て、新たな噂話やゴシップ、そして差別的言動の種となっていくた。³⁴ 人痘接種反対を旗幟鮮明にし、それを推進するマザー父子らピューリタン権威への皮肉と嘲笑を綴った *New England Courant* の紙面は、地元の問題を一手に浚った。

天然痘論争は、ビラやパンフレットから、より公開性の高い新聞紙上へと主戦場を移し、植民地アメリカのジャーナリズム史上、もっとも熱い議論のひとつとなった。人痘接種推進派の新聞、*Boston Gazette* の執筆陣には、ピューリタン指導者インクリース・マザー、コットン・マザー父子を筆頭として、ベンジャミン・コールマン、医師ザブディアル・ボイルストンらが名を連ねた。対する反対派の *New England Courant* は、ジョン・チェックリー、ウィリアム・ダグラス、そしてダグラスの方針に従って *Courant* 創刊の資金を共同出資した、医師ジョージ・スチュワード (George Steward)、ジェームス・フランクリンらによって執筆されていた。

両紙は、論者の実名を紙上で明らかにするか否かの点においても対照的なものとなった。マザー父子ら推進派メンバーが *Gazette* に載せた記事は、殆どが実名署名入りで掲載されていた。しかし当時の新聞の常識を考えれば、マザーらの実名記事は希有なものであった。³⁵

対する *Courant* の主張は、実名を伏せ、仮名、ペンネーム、あるいは無署名（匿名）で行われた。

唯一、実名を記したのは、発行人ジェームス・フランクリンのみであったが、そのジェームスですら、しばしば、匿名や仮名で自らの新聞への「投稿」を行うのが、*Courant* の姿であった。

Courant の匿名記事に対して行われた *Gazette* の実名での反論は、常に *Courant* 側の粗暴極まりない罵倒や嘲笑、皮肉と対峙せねばならなかった。人痘接種を推進した執筆陣がピューリタン指導者であったことは、彼らを不安定な立場におくこととなった。彼らは断じて相手方の意図的な誘いや挑発に応じてはならなかった。ビラやパンフレットでの言い争いとは異なり、広く公にされ、記録として残る新聞紙上では、ひとたび対応を誤れば一気に不利な立場に追い込まれてしまう危険性があった。ニューイングランド開拓の核となり、制度上でも保障されてきたピューリタニズムの権威は、ここに来て、一切の間違いを許されない苦しい立場に置かれていた。

感染症パニックの状況を鑑みれば、論争が激化すればするほど、実名を記したグループに不利に働くことは明白であった。医学的知識の乏しかったこの頃の人々に、人痘接種の危険性を訴え、同調を誘うことは容易であった。そして接種を勧める人々を非難し、不安と怒りの矛先を彼らへ向けさせることも、さして難しいことではなかった。チェックリーやダグラスにしてみれば、*Courant* は元々、そのために準備した新聞であった。コットン・マザーら接種派の主張を、匿名やペンネームを用いて可能な限り批判することによって、相手方の権威を毀損し、自分たち反接種派への支持を取り付ける。これに動揺したマザーらから怒りの言葉や過激な反応を引き出すことができれば、自分たちは労せずして新たなピューリタン批判の種を手にすることができるわけであった。

一方、ジェームスにとって、チェックリーらの方針は願ってもないことであった。*Boston Gazette* と *New England Courant* の間で感情論の応酬が実現すれば、彼は念願の *Gazette* への復讐を果たすことができた。コミュニティの宗教権威に対し、紙上で痛烈な批判を加えることそれ自体、既にこの頃の民衆の娯楽であった。そしてもし、その批判に対する聖職者側の感情的な反論が *Gazette* 紙上に見られれば、次の *Courant* を期待する読者の楽しみともなるはずであった。すべてがジェームスの思惑を叶え、同時に *Courant* の売り上げにも直結すると言う仕組みであった。事実、*Courant* 創刊後のジェームスの生活はめざましく向上し、1723年には結婚、そして子宝にも恵まれていった。³⁶

元々、ジェームスの背後に控えていたメンバーは、*Boston News Letter* で匿名や仮名の投書を繰り返してきた面々であった。例えば、ウィリアム・ダグラスは、ペンネーム “W. Philanthropos”, “W. Philanthroper” (共に「人類の恋人 (lover of mankind)」の意) を用いて、接種推進派の医師を激しく罵っていた。1721年7月17日号の *News Letter* で、ダグラスは、コットン・マザーの協力者であった医師ザブディアル・ボイルストンに対し、「文盲で無知、ガーガー騒がしいアヒルのようなもの (“the Undertaker, being illiterate, was not capable of duly Understanding the Writings of those Foreign Gentlemen, being Ignorant, for by his own Confession never had but small Opportunities of seeing Practice in the Small Pox, and at the time of Publishing his dangerous quack Advertisement”³⁷)」と、感情むき出しの罵倒を行っていた。

当時の医師の大半がそうであったように、ボイルストンもまた、正規の学校教育を受けずに、医

師の下での修業によって開業した人物であった。天然痘問題では、マサチューセッツの開業医の大半がダグラスの見解に従っており、それに逆らって、医師ではないコットン・マザーの対処法を是としたボイルストンは、許すことのできない相手だったのである。

このダグラスの下品で低俗な非難に対し、インクリース・マザー、コットン・マザー、そしてベンジャミン・コールマンは、署名付き連名でボイルストンを擁護した。文中、マザーらは、ボイルストンが、内科、外科双方において、長い間地域医療に貢献してきた人物であり、正規の医学教育こそ受けてはいないものの、「文盲」や「無知」などと批判されるべき人物ではない（“tho’ he has not had the honour and advantage of an Academic Education...yet he ought by no means to be call’d Illiterate, ignorant &c...”³⁸）と反論したのであった。

12

New England Courant 創刊号は、天然痘問題に関して、反ピューリタン、反マザー父子の立場を鮮明にした。以下、関連箇所を引用する。

“Who like faithful Shepherds take care of their Flocks,
By teaching and practising what’s Orthodox,
Pray hard against Sickness, yet preach up the POX!”

“B--n was represented in a soft Manner, as illiterate, ignorant, rash, &c. only with respect to the Small Pox, and the dubious, dangerous Practice of Inoculation; these Gentleman are called so in gross. Why should Gentleman otherwise well qualified be called illiterate, Ignorant, &c. because they did not idle away four Years at Colledge, as some of our learned Men have done?”

“Is this no more than Bleeding or Blistering? Infatuation I think is like to be as Epidemick a Distemper of the Mind, as at present the small Pox is of the natural Body.” (*The New England Courant*, 1721/8/7)

Courant は、人痘接種に反対した人々を、無知で無学な連中と決めつけたマザーら接種推進派を痛烈に嘲笑し、皮肉った。地域の有識者、指導者たちを念頭に「接種に反対の人々は、あなたたちのように、大学で4年間も怠けてはこなかった。あなたたちに、果たして彼らを、無教育な文盲、無知などと言う資格があるのだろうか？（“Why should Gentleman otherwise well qualified be called illiterate, Ignorant, &c. because they did not idle away four Years at Colledge, as some of our learned Men have done?”）」と、民衆が思わず喝采するメッセージを放つのであった。

New England Courant は、人痘接種を恐れる人々の味方として旋風を起こし、一躍注目の的となった。それまで長い間、ニューイングランド、マサチューセッツのピューリタン制度下で、沈黙を

余儀なくされていた民衆は、これを機に声を上げ始めた。

勢いに乗った *Courant* は、続く第二号から人痘接種に関する連載を開始し、より積極的にマザールへの疑念と批判を書き綴った。例えばウィリアム・ダグラスは、1721年8月21日付け *Courant* に、匿名で接種の危険性を訴えた。

To the Author of the New England *Courant*.

Sir,

Finding the Infatuation of ingrafting the Small Pox *not altogether stified*, we present the Town with some Animadversions on a *late Advertisement*, published by the four inoculated Men; and a further *Dissuasive* from that rash, sometimes hazardous, and always dubious Practice...

They begin by insinuating, that the Town may think this is a *desperate Remedy*; the Small Pox being a *very desperate Disease*, required no less. *The Small Pox in Boston* (they say) *is a terrible Distemper, whereby many were severely and dreadfully handled, and whereof so many died, as gave an awful Prospect*. This would better suit the *Plague at Marseilles*, and is more than sufficient to occasion that worst of Symptoms in the small Pox, *Fear & Dejection of Spirits*: And as a *False Rumour* may tend to obstruct the Towns being supplied with Provisions from the Country, and interrupt all Trade, Commerce and Communication with our Neighbouring Colonys; we reckon it our Duty to expose this as *Imprudent*, and *notoriously false*. We find that from the Arrival of the Small Pox here about the middle of *April* last, to the Date of this Advertisement, the *Burials* in Town here not *exceeded* those...of other Years, for the same space of time. Few Epidemick or Popular *Fevers* of any sort, have been *more favourable*...

How boldly do they tell the greatest Part of the Town, that tho' many asserted Inoculation to be a Case of Conscience, &C. few if any really believed it: This in plain English (pardon the Indecency of the Expression) is *calling the Town Lyar*...

By Affidavit and Declarations lately published, we find that the Inconveniencys of Diseases proceeding from Inoculation, are...high Fevers, and other dangerous Symptoms *immediately attending the Inoculation*. *M. Delhonde* deposeeth that some have died in that State. The Town knows the violence of *B---n's* Son's Inoculation-fever, the narrow Escape of old Mr. *W---b*, the heighth [sic] of *C---'s* Fever, the great Degree of Despair in Mr. *H---r* while ill; these being four in ten of the Inoculated, and three of the four Advertisers. (Copeland, 2000, pp. 18-19, *New England Courant*, 1721, 8, 21, 二次使用, 字体, 綴り等, すべて引用文献のママ)

ダグラスとともに、*Courant* 創刊の資金協力をしたジョージ・スチュワードは、ペンネーム“Abisinthium”を用いて、1721年12月18日付けの *Courant* へ投書を掲載した。“Abisinthium”とは、酒好きに飲ませると毒物にもなる薬草を指し、この投書名は、薬害から想像できる人痘接種の害を比喻していた。自身も二十年の臨床経験を持つ医師であると明かしたスチュワードは、投書文の中で天然痘による死の惨状を生々しく列記し、人痘接種が、決して賢明な医師の行う処置ではないと読者に説いた。そして、この世に安全な対処法など存在しない以上、人痘接種を勧めるものは、故意に人を死に至らしめる罪深きものであると結んだ。

To the Author of the New-England Courant.

Sir,

Since in your last *Courant* you was pleased to say, *That both Anti-Inoculations and Inoculators should be welcome to speak their Minds in your Paper*, I send the following Reasons against inoculating the Small Pox, which I hope in pursuance of your Promise, you will insert in your next if you have Room.

The first Reason then is, That this Operation being perform'd upon none but such as are in perfect Health, and who, for any thing the Doctor or Patients know, may be such who may never have that Distemper in their lives, or if they have, not to that Degree as to make it mortal to them: and then it must be needless to the last Degree, for any Man to have himself made sick in order to prevent that which for any thing he knows, he is no Danger of.

But in the Second Place, much more so, when the Persons that are for that Operation, cannot answer this Small Question to the Satisfaction of any rational Creature, viz. *Whether this Operation is Infallible, so that hitherto there is not any Body has perished, that has had the Small Pox produced by it*. I say, this is a Point the World will find them for ever tender upon: and altho' they would fain insinuate that it is infallible, yet they will never give you a direct Answer, but will put you off with this, *That there is nothing infallible in Physick; for that they have known Persons dye by a Vomit, and other by Bleeding, &c.* But allowing what they say to be true, for once; these Gentlemen never distinguish betwixt making a *well Man sick*, and endeavouring to make a *sick Man well*; for certainly there is not any thing will defend any Man's bringing a Sickness on himself, unless he is sure that he cannot die of that Illness he does so bring upon him; for we are obliged to preserve the Health we have; as much as we are obliged to preserve our Lives: Whereas on the other Hand, in giving of *Vomits, &c.* it is never done by wise Physicians, but to Persons who have usually *lost their healths*, and of Course it is allowable to run a little Risque to recover that Health which it has pleased God to take from him...I have seen Physick practised by some of the ablest Physicians that ever the World saw, and have been practising of it my self this twenty Years past. But I must say, I never saw any Man die by *Bleeding* or *Blistering*, or by *Vomiting* or *Purging*, provided they were given proper Doses. But if ignorant People, who neither understand Physick nor the Doses of Medicines, will be doing what they should not do, no Wonder if we see Instances of these innocent Things proving Mortal...

And the third reason is, that if they should say, *Inoculating the Small Pox is an infallible way to preserve Life*. I say, if they should say so, it is false in Fact; For Dr. *Emanuel Timonius* in his Letter to Royal Society, owns, that he saw Two die that were inoculated; but at the same Time would fain insinuate, that they died of some other Distemper, which is the very Error his Disciples on the side the Great *Atlantic* fall into...

My fourth Reason is, that altho' we see sundry Persons have the Small Pox favourably that are inoculated, and so escape; yet we see, (these Gentlemen own it themselves) that they are capable of infecting their Neighbours to as great a Degree as those that are smitten the Common Way...I say, how lawful or commendable it may be for any person so to act, must be left to those Gentlemen, who have wrote in Favour of Inoculation, who are certainly excellent Commentators on the Sixth

Commandment.

And now, sir, if this may find a Place in your Paper, I will take leave to subscribe my self,
Your well Wisher,

ABSINTHIUM. (Copeland, 2000, pp. 19-20, *New England Courant*, 1721, 12, 18, 二次使用, 字体, 綴り等, すべて引用文献のママ)

New England Courant のコピーは, その印字品質と保存状態から, 判読不能の箇所が多く, ここで引用した投書は, 双方ともに Copeland, *Debating the Issues in Colonial Newspapers: Primary Documents on Events of the Period*, Greenwood Press, 2000 に提示されているものを二次使用した。

註

1. “Franklin, James”, Carolyn G. Cline, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, pp. 239-241.
2. Benjamin Franklin, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, Dover Publications, 1996, pp. 9-10 ならびに “Franklin, James”, Carolyn G. Cline, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, p. 240.
3. “Franklin, James”, Carolyn G. Cline, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, p. 240.
4. Jeffery A. Smith, *Printers and Press Freedom: The Ideology of Early American Journalism*, Oxford University Press, Inc., New York, 1988, p. 97.
5. “Franklin, James”, Carolyn G. Cline, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, p. 240.
6. Benjamin Franklin, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, Dover Publications, 1996, p.14.
7. Benjamin Franklin, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, Dover Publications, 1996, p.15.
8. James Melvin Lee, *Reproduction of History of American Journalism*, Houghton Mifflin Company, Boston & New York, 1917 by Ulan Press, 2012, p. 15, “Harris, Benjamin”, Carolyn G. Cline, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, pp. 315-317.
9. David Paul Nord, *Communication of Journalism: A History of American Newspapers and Their Readers*, University of Illinois Press, 2001, pp. 32-33.
10. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, p. 35.
11. *A Model of Christian Charity*, The Winthrop Society, https://www.winthropsociety.com/doc_charity.php, 最終検索日2020/02/29.
12. David Paul Nord, *Communication of Journalism: A History of American Newspapers and Their Readers*, University of Illinois Press, 2001, pp. 1-2.
13. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, pp. 5-8,

- “Roger Williams”, History.com. A&E Television Networks. 2009. Archived from the original: 2009/10/29, updated: 2020/2/4, <https://www.history.com/topics/reformation/roger-williams> 最終検索日 2020/02/10 ならびに “Roger Williams”, Biography.com, Archived from the original: 2015/9/18, updated: 2019/4/16, <https://www.biography.com/> 最終検索日2020/02/11.
14. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, p. 8.
 15. Ibid.
 16. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, pp. 39-40.
 17. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, p. 38.
 18. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, p. 114.
 19. Frank Morral & Barbara Ann White, *Hidden History of Nantucket*, The History Press Charleston, SC, 2015, pp.97-98 ならびに Walter Isaacson, *Benjamin Franklin: An American Life*, Simon& Schuster Paperbacks, New York, 2004, pp. 13-15.
 20. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, p. 220.
 21. この時代の統計数値は推定であり、当時の人口、天然痘罹患者数および死者の数についても、すべてこの域を出ない。本稿で引用した数値については、以下の二つの文献資料に見られるものを使用した。Matthew Niederhuber, “The Fight Over Inoculation During the 1721 Boston Smallpox Epidemic”, *SPECIAL EDITION ON INFECTIOUS DISEASE*, December 31, 2014, Harvard University, The Graduate School of Arts and Sciences, <http://sitn.hms.harvard.edu/flash/special-edition-on-infectious-disease/2014/the-fight-over-inoculation-during-the-1721-boston-smallpox-epidemic/>, 最終検索日 2019/08/29 ならびに Jeffery A. Smith, *Printers and Press Freedom: The Ideology of Early American Journalism*, Oxford University Press, Inc., New York, 1988, p. 99. この内、Niederhuber が提示した資料では、ボストンの人口約11,000、罹患者数6,000、死者数850としており、Smith は、人口約12000、罹患者数6,000、死者数800以上と記している。本稿では、これら双方の許容数値範囲を記した。
 22. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, p. 224.
 23. “Franklin, James”, Carolyn G. Cline, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, p. 240 ならびに David A. Copeland, *Debating the Issues in Colonial Newspapers: Primary Documents on Events of the Period*, Greenwood Press, 2000, Westport CT, p. 14.
 24. Jeffery A. Smith, *Printers and Press Freedom: The Ideology of Early American Journalism*, Oxford University Press, Inc., New York, 1988, p. 97, Jenny Reese, *The History of American Newspapers: Early Publications, Thomas Paine, Isaiah Thomas and Other Historical Journalistic Figures*, CPSIA information at www.ICGtesting.com, Printed in the USA, p. 2, The Electric Ben Franklin, <http://www.ushistory.org/franklin/courant/story.htm#dogood>, 最終検索日 2019/08/29 ならびに “James, Benjamin”, Carolyn G. Cline, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, p. 239.
 25. Donald A. Ritchie, *American Journalists: Getting the Story*, Oxford University Press, New York, 1997, p. 16 ならびに Jeffery A. Smith, *Printers and Press Freedom: The Ideology of Early American Journalism*,

- Oxford University Press, Inc., New York, 1988, p. 98.
26. Frederic Hudson, Reproduction of *Journalism in the United States, from 1690-1872*, Harper & Brothers, New York, 1873, by Arkose Press, 2015, p. 60, “The American Weekly Mercury”, The News Media and the Making of America, 1730-1865, American Antiquarian Society, <http://americanantiquarian.org/earlyamericannewsmedia/items/show/29>, 最終検索日 2019/08/13 ならびに “Bradford Andrew”, Anna Janney Dearmond, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, pp. 67-68.
 27. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, p9. 321-323.
 28. David Paul Nord, *Communication of Journalism: A History of American Newspapers and Their Readers*, University of Illinois Press, 2001, p. 53.
 29. Frederic Hudson, Reproduction of *Journalism in the United States, from 1690-1872*, Harper & Brothers, New York, 1873, by Arkose Press, 2015, p. 62.
 30. Frederic Hudson, Reproduction of *Journalism in the United States, from 1690-1872*, Harper & Brothers, New York, 1873, by Arkose Press, 2015, pp. 61-62 ならびに James Melvin Lee, Reproduction of *History of American Journalism*, Houghton Mifflin Company, Boston & New York, 1917 by ULAN Press, pp. 29-31.
 31. Frederic Hudson, Reproduction of *Journalism in the United States, from 1690-1872*, Harper & Brothers, New York, 1873, by Arkose Press, 2015, p. 63.
 32. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, pp. 224-225.
 33. Jeffery A. Smith, *Printers and Press Freedom: The Ideology of Early American Journalism*, Oxford University Press, Inc., New York, 1988, p. 98.
 34. Daniel J. Boorstin, *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958, pp. 224-225.
 35. David A. Copeland, *Debating the Issues in Colonial Newspapers: Primary Documents on Events of the Period*, Greenwood Press, 2000, Westport CT, pp. 14-15.
 36. “Franklin, James”, Carolyn G. Cline, *Biographical Dictionary of American Journalism*, edited by Joseph P. McKerns, Greenwood Press, 1989, pp. 241.
 37. “angry Debate and fierce Contention”, “Falsities and Absurdities” VACCINATE FOR SMALLPOX? The paper war during Boston’s smallpox epidemic of 1721, National Humanities Center, The Paper War over Smallpox Vaccination in Boston, 1721, Selections., <http://nationalhumanitiescenter.org/pds/beingamer/ideas/text5/smallpoxvaccination.pdf>より二次使用, 最終検索日2019/11/15.
 38. Ibid..

参考文献

- Boorstin, Daniel J., *The Americans: The Colonial Experience*, Vintage Books, New York, 1958.
- Copeland, David A., *Debating the Issues in Colonial Newspapers: Primary Documents on Events of the Period*, Greenwood Press, 2000, Westport CT.
- The Electric Ben Franklin, <https://www.ushistory.org/franklin/index.htm>.
- Franklin, Benjamin, *The Autobiography of Benjamin Franklin*, Dover Publications, 1996.
- Hudson, Frederic, *Reproduction of Journalism in the United States, from 1690-1872*, Harper & Brothers, New York, 1873, by Arkose Press, 2015.
- Isaacson, Walter, *Benjamin Franklin: An American Life*, Simon & Schuster Paperbacks, New York, 2004.
- McKerns, Joseph P., *Biographical Dictionary of American Journalism*, Greenwood Press, New York, Connecticut, London, 1989.
- Melvin Lee, James, *Reproduction of History of American Journalism*, Houghton Mifflin Company, Boston & New York, 1917 by Ulan Press, 2012.
- Morral, Frank & White, Barbara Ann, *Hidden History of Nantucket*, The History Press Charleston, SC, 2015
- National Humanities Center, The Paper War over Smallpox Vaccination in Boston, 1721, Selections., <http://nationalhumanitiescenter.org/pds/becomingamer/ideas/text5/smallpoxvaccination.pdf>.
- The New England Courant*, Monday, August 7, 1721, The Electric Ben Franklin, <http://www.ushistory.org/franklin/courant/issue1.htm>. なお、この資料に関しては、時間経過と共に原典（オリジナル）の印刷品質から、字体判読が難しい箇所が多く、すべてオンライン上の字体のままとした。引用元の注意書きも、未だオリジナルとの照合がなされていない箇所が残る（2020/02/29現在）と記していることを注記しておく。以下、引用元注：“IMPORTANT NOTE: Some of the transcriptions of The Courant given here have not had the proofreading corrections completed.” 最終検索日2019/11/15.
- The News Media and the Making of America, American Antiquarian Society, <http://www.americanantiquarian.org/earlyamericannewsmedia/>.
- Niederhuber, Matthew, “The Fight Over Inoculation During the 1721 Boston Smallpox Epidemic”, *SPECIAL EDITION ON INFECTIOUS DISEASE*, December 31, 2014, Harvard University, The Graduate School of Arts and Sciences, <http://sitn.hms.harvard.edu/flash/special-edition-on-infectious-disease/2014/the-fight-over-inoculation-during-the-1721-boston-smallpox-epidemic>.
- Paul Nord, David, *Communities of Journalism*, University of Illinois Press, Urbana, Chicago, and Springfield, 2001.
- Reese, Jenny, *The History of American Newspapers: Early Publications, Thomas Paine, Isaiah Thomas and Other Historical Journalistic Figures*, CPSIA information at www.ICGtesting.com, Printed in the USA.
- Ritchie, Donald A., *American Journalists: Getting the Story*, Oxford University Press, New York, 1997.
- Smith, Jeffery A., *Printers and Press Freedom: The Ideology of Early American Journalism*, Oxford University Press, Inc., New York, 1988.

The Winthrop Society, https://www.winthropsociety.com/doc_charity.php.

*筆者註：本稿の引用資料（オリジナルが参照可能な新聞を含む）は、綴り、大文字、小文字の別、コンマ、ピリオド、引用符、段落のインデントなど、極力、原典資料を模した。ただし、字体品質の関係から、全文に渡っての判別が難しい部分（フォント、イタリック箇所等）については、この対象外とした。

Appendix: *The New England Courant*, Monday, August 7, 1721, 第一面（表面）, Image of *New England Courant*, The Electric Ben Franklin, <http://www.ushistory.org/franklin/images/1.jpg>よりイメージサイズ拡大の上、転載。最終検索日2019/08/21。

THE New-England Courant.

MONDAY August 7. 1721.

Homo non unus Negotii: Or, Jack of all Trades.

M^r John Cheekley

IT'S an hard Case, that a Man can't appear in Print now a Days, unless he'll undergo the Mortification of Answering to ten thousand senseless and Impertinent Questions like these, Pray Sir, from whence came you? And what Age may you be of, may I be so bold? Was you bred at Colledge Sir? And can you (like some of them) square the Circle, and cypher as far as the Black Art? &c. Now, tho' I must confess it's something to be a Man in his, that to be stop'd at his first setting out, yet in Compliance to the Custom of the Country where I now sit up for an Author, I'll immediately stop short, and give my gentle Reader some Account of my Person and my rare Endowments.

As for my Age, I'm some odd Years and a few Days under twice twenty and three, therefore I hope no One will hereafter object against my saying now and then with the grave Wits of the Age, *force I have dropt my fellow Praters, and am pretty well fogg'd*: but if they should tell me that I am not yet fit nor worthy to keep Company with such illustrious Sages, for my Beard do'sn't yet reach down to my Girdle, I shall make them no other Answer than this, *Barba non facit Philosophum*.

I make no Question my gentle Readers, but that you're very Impatient to see me entirely dissol'd, and to have a full View of my outward as well as inward Man, but as I stop short just now, merely to oblige you, so I shall stop as soon here, and give no farther Account of my self until this Day fortnight, when you shall have a further Account of this useful Design, and of my great Endowments of Body and Mind.

As to engage the World to converse farther with me, I find me in the good Company of a certain Set of Men, of whom I hope to give a very good Account.

Who like faithful Shepherds take care of their Flocks, by teaching and practising what's Orthodox, Pray hard against Sickness, yet preach up the P.O.X!

N.B. This Paper will be published once a Fortnight, and out of meer Kindness to my Brother-Workers, I intend now and then to be (like them) very, very dull; for I have a strong Faury, that unless I am sometimes fat and long this Paper will not be very grateful to you.

Dr Douglass

abnormis sapiens. — Hor.

At the Request of several Gentlemen in Town:
A Continuation of the History of Inoculation in Boston,
by a Society of the Practitioners in Physick.

THe bold undertaker of the Practice of the Greek old Women, notwithstanding the Terror and Confusion from his Son's Inoculation-Fever, proceeds to inoculate Persons from Seventy Years of Age and downwards.

The Select Men (or Managers of the Town Affairs) in duty bound to take Cognizance of the Matter, define a Meeting of all the Practitioners in Town, to have their Opinion whether the Practice ought to be allowed or not; they unanimously agreed that it was rash and dubious, being entirely new, not in the least vouch'd or recommended (being merely published, in the Philosophick Transactions by way of Amusement) from Britain, tho' it came to us via London from the Turks, and by a strong viva voce Evidence, was proved to be of fatal & dangerous Consequence. — It is desired by the Select Men to desist.

Notwithstanding the general Aversion of the Town, in Contradiction to the declared Opinion of the Practitioners, in Opposition to the Selectmen, and in spite of the discouraging Evidences relating to this Practice, Six Gentlemen of Piety and Learning, profoundly ignorant of the Matter, after serious Consideration of a Dispute one of the most intricate practical Cases in Physick, do on the Merits of their Characters, and for no other reason, with a Vox praterans; nihil, assert, &c. If this Argument, viz. their Character, should prevail with the Populace (tho' here I think they have mislead of their Aim) who knows but it may oblige some prophane Person to canvas that sort of Argument. I think their Character ought to be sacred, and that they themselves ought not to give the least Occasion to have it called in question. They set up for Judges of a Man's Qualifications in the Practice of Physick, and very lavishly bestow all the fulsome common Place of Quack Advertisements. One would think they meant some Romantic Character, something beyond that of candid Sydenham, the sagacious Radcliff, or the celebrated Mead: They might indeed in respect of his moral and religious Qualifications, which lay properly under their Cognizance, have said, *That he was a modest, humble Man, a Man of Continency, Probity, &c.* At first reading of this Compliment, many were persuaded, that it was only a Piece of Humour, Baater, Buileague.

